学校生活支援シートを活用した引継ぎの事例　⑦

～外部専門家による助言を受けた支援の方法の継続～

事例（ろう学校）

・　小学部５年（現在）　　障害名　感音性難聴

（４年次の児童の様子）

・　授業中に教室を飛び出して校舎を散策しようとしたり、気に入っている教室に勝手に入ろうとしたりする。

・　近くにいる友達をたたいたり引っかいたりすることがある。

・　友達を呼ぼうとして肩をたたく際に強くたたいてしまうことがある。

・　姿勢の保持が苦手で、身体を揺らしたり曲げたりしていることが多い。

・　コミュニケーションに聴覚を活用することがまだ難しく、手話が主な手段ではあるが、50 語程度にとどまっている。

■保護者のねがい

・　自分の気持ちを伝えられるようになってほしい。

・　自分で気持ちのコントロールができるようになってほしい。

■担任のねがい

・　友達をたたいてしまったり、パニックになって泣き続けてしまったりすることがあるので、自分の気持ちを伝えられるようになってほしい。

・　突然教室から飛び出して、自分の好きな場所に行ってしまうことがあるので、集中して授業を受けられるようになってほしい。

外部専門家の助言を受けた支援の計画

■　支援会議の実施（計 2 回）

【参加者】外部専門家、保護者、担任、副校長、主幹教諭

支援会議で得られた助言

①　コミュニケーションについて

・PECS を用いてコミュニケーションを図れるようにしていくことが、望ましい。

・PECS のカードを用意するときは、児童のニーズやモチベーションを考慮して作成する必要がある。

②　行動面の問題について

・トークンエコノミー法の考え方を導入することで、行動面の問題を予防できるようになると考えられる。

・トークンエコノミー法を導入する際に、「生理的欲求」が満たされるようにしていくと効果的である。

・トークンエコノミー法の効果的な導入には対象児が好きな物や遊び、場所などを把握しておく必要がある。

③　授業中の姿勢や離席について

・感覚処理に課題があり、しきい値が大きいと考えられる。そのため、前庭覚の刺激を取ろうとして突然飛び跳ねているのではないか。休み時間などを使って、感覚を満たすようにすると座って授業に参加できるようになる可能性がある。

・バランスボールを使って体を揺らすと前庭覚が刺激される。

・姿勢が崩れてしまう原因の一つとして、舌咽神経に課題がある場合がある。口腔ケア等を行い、舌の運動をすると姿勢が保持できるようになる。

※PECS とは

絵カード交換式コミュニケーションシステムのことで、絵カードを使ってコミュニケーションを図る方法のこと。

※トークンエコノミー法とは

望ましい行動をとった際に物品などの報酬を与えることで、望ましい行動を多くとれるようにする方法のこと。

保護者

具体的な子供との関わり方を、考える機会を得ることができました。

■「支援会議の内容を学校生活支援シートに反映」

３－１　支援の目標	
・日常生活に見通しをもち、自立的・積極的に生活をする。 ・手話、音声、絵カード等を用い、意思を伝え、行動をコントロールする力を高める。	
学校の指導・支援	家庭の支援
・安全に落ち着いて学習できるような教室環境の整備や人員配置を行う。 ・普段の学校生活の中で、手話、音声、PECS などを用いて様々に表現する期間を確保する。 ・スケジュール帳やトークンエコノミー法を用いて、見通しを持って主体的に学習できる工夫をする。	・発声・発音を意思したやり取りの練習。睡眠リズムの安定のため就寝前に糖分を取らせている（専門家の助言によるもの）。 ・トイレのドアを閉めてトイレをする練習。 ・すぐ手をつなごうとしたり抱きつこうとしたりするため「手をつなごう」と言うことや、抱きつく代わりに「好き」と言うことを教えている。 ・両親の名前を教えている。 ・自分の気持ちをコントロールするのが難しいときがあるため、写真やマスクなど好きなものを持たせ気を紛らわさせている。今後、トークンエコノミーを活用していきたいと考えている。 ・日常生活の中でお手伝いなどを通していろいろな経験を積ませたい。

■学校では

・　教室内の掲示物や机の配置等を構造化し、落ち着いて授業に取り組めるようにする。

・　朝の会等で友達を呼ぶ際には、友達の肩に触れて声をかけ、発声を意識しながら名前を呼ぶようにする。

・　生活単元学習では自分がやりたい活動を、PECS を使って担任に伝える活動を取り入れる。

・　国語や算数で、決められた課題を達成したときの「トークン」を一定数ためることで好きな活動（報酬）を得られるようにする。

・　感覚統合の視点から、掃除の時間に雑巾掛けをしたり机を運んだりする活動を取り入れる。

■家庭では

・　専門家のアドバイスを取り入れ、トークンエコノミー法を活用したいと考えている。活用する場面や方法については学校と相談をして進めていく。

個別指導計画に反映

■　学校生活支援シートの内容から学校生活への反映

使用してきた教材等

■ＰＥＣＳ
・ＰＥＣＳを用いて遊んでもらいたい相手に要求ができるように指導をする。

PECS ブック

■トークンエコノミー法
・社会的にふさわしい行動場面でシールを渡し、報酬を得られるようにした。

トークンエコノミー表

■スケジュール
・朝や帰りの準備のスケジュールを個別に提示するようにした。

手順カード

■感覚統合
・バランスボールやトランポリンを感覚統合の視点から授業に取り入れた。

バランスボール

トランポリン

■次年度に向けた担任間の引継ぎ

7　来年度への引継ぎ

【コミュニケーション】将来を見据えて PECS を用いたやり取りができるよう指導を継続してほしい。友達や周りの大人へ要求や気持ちを伝えたいときの声の掛け方、距離の取り方をその都度指導してほしい。
【生活面】生活リズムが整ってきているため、長期休暇に入っても学校と同じ生活リズムを保てるように指導をお願いしたい。一日の学校生活や家庭生活、数日先の予定などのために、見通しをもって自分で自分の支度をするように促し、自分でできる経験を積ませたい。
【心身及び社会性】集団生活を通して活動内容や自分の役割を少しずつ理解できるようにしていきたい。他の教員と連携し学校のルールを守る経験を積んでほしい。
【学習面】バランスボールを使った感覚統合運動など体作り。語彙の拡充。発声と発話。3 以上の数の概念を拡げる。集中が切れたり、学習意欲が途切れたりすることがあるため、トークンエコノミー法やスケジュールを活用し見通しと意欲をもって学習に臨めるようにしたい。
【その他】日記指導を通して話を広げ、新しい語彙と手話表現の獲得に活用するため、できるだけ学校生活での写真が欲しい。

生徒の変化

- 休み時間に自分がしたい遊びを、遊びたい相手にＰＥＣＳを使って伝えることができるようになりました。
- 給食の際に、苦手なものを減らして欲しいと担任にＰＥＣＳを使って伝えることができるようになりました。
- トークンエコノミー法を導入したことで、報酬を得られるまでの見通しがもてるようになり、突然教室を飛び出したり、友達をたたいたりすることが少なくなりました。

保護者の反応

- 家庭生活の中でも、トークンエコノミー法を取り入れるようにしました。コンビニエンスストアで買い物をするのが好きなので、洗濯物を畳んだり掃除をしたりするお手伝いができたときにはトークンを与え、報酬としてお金を得てコンビニエンスストアで買い物をするようにしています。
- トークンエコノミー法を取り入れることで、少しずつ見通しがもてるようになり、自ら進んで手伝いをしようとする様子が見られるようになりました。

■　担当する教員が気付いたこと

- 学校生活支援シート作成のための保護者アンケートや、学校生活支援シートを通して保護者の願いを事前に把握して、教材準備や支援の方法を検討しました。
- 学校生活支援シートには、支援会議の内容や、引継ぎの項目があったことで、新しい担任はスムーズに引継ぎができました。
- 家庭で取り組む内容が明確になり、担任と保護者が共通認識をもって支援をすることができました。また、具体的な支援方法を検討する際にも学校生活支援シートを活用できました。

学校生活支援シートを活用した引継ぎの事例　⑧

～中学部への引き継ぎで学校生活支援シートを活用する～

事例（知的障害特別支援学校）

・　中学部１年（現在）　　障害名　自閉症

（小学部の児童の様子）

・　急な予定の変更が苦手だったが、スケジュールを提示し一緒にゆっくり確認をすることで、納得して次の行動に移れることが多くなってきている。

・　ひらがな、カタカナの読みはほぼ理解することができる。知っている言葉ならよく聞き取ることができる。

・　食事では箸を使えるようになり、一気に口に詰め込みすぎてしまうことがあるが、何でも残さず食べることができる。

・　友達の様子を気にする姿が見られるようになり、順番を視覚的に提示すると、友達の手を引いて誘導する様子が見られた。

■本人・保護者のねがい

・　ＩＣＴ機器などの利用で言語の理解深め、表現方法を身に付けて欲しい。

・　自分の荷物の準備など自分でできることを増やしていって欲しい。

・　自分で気持ちのコントロールができるようなってほしい。

■小学部担任のねがい

・　小学部では、視覚支援がとても有効であったため、中学部でも引き続きスケジュールカードを活用したい。

・　個別の課題学習ではＰＥＣＳなどの言語代替手段を用いることで、要求を表現する機会が増えたため、活用できる場面を増やしたい。

中学部への進学に向けて、小学部での支援を再度見直しました。
家庭で興味をもって取り組んでいるＩＣＴ機器での学習を学校でも取り入れ、スケジュール作りやコミュニケーションの学習に活用していきたいと思います。

■　支援内容･方法の形成的評価

○有効な支援①

・日常生活場面で、本人がやりたい活動を伝える場面では、ＰＥＣＳなど（言語代替手段）を個別課題学習ですすめた。

↓

自分が欲しいものを、「○○先生、△△をください」と伝える場面が増えた。

○有効な支援②

・学校のスケジュールカードと同様のスケジュール表を、「今週の予定」として毎週渡し、その表を見て毎朝今日の予定を保護者と確認して登校した。

↓

その日の見通しを事前にもって過ごすことができるようになった。また１週間の予定を見て、変更にも対応できるようになってきた。

個別課題で使用する教材

「何色がいくつ必要？」

■ 個人面談（保護者との合意形成①）（２月）

・　スケジュールを事前に提示したり、保護者と協力して家庭でのスケジュール表の確認を行ったりすることで、急な予定の変更に対応できる力が付いている。
・　ＩＣＴを活用した教材に興味をもっているので、学習に取り入れていく。
・　中学部では、家庭と協力し、コミュニケーションツールとして言語を代替する手段の活用を図る。

進級に伴う担任間の引継ぎ

７　来年度への引継ぎ
・ 家庭ではタブレット端末のアプリケーションでコミュニケーションをとることができているので、学校でも同様のやり方でコミュニケーションをとることができるようになったらと考える。 ・ 個別課題学習ではPECSを使用し、「何色がいくつ必要？」と要求を伝える学習では、「赤色を2個ください」など、助詞を使った文章にすることが可能である。 ・ 自分の名前は、ほぼ漢字で書くことができるようになってきたので、毎日の学習の中で積極的に漢字を取り入れる。 ・ スケジュールを事前に伝えることはとても有効で、スケジュールの変更も朝の会で伝えると対応できる。受け止めきれず不安定になることもあるが、理解すると自分から次に進むことができる。

中学部への進学に向けて、保護者との面談を通して引き継ぐ支援や新しく取り入れたい支援を確認し、学校生活支援シートの「来年度への引継ぎ」に記載しました。

進級（小学部卒業・中学部入学）

■ 引継ぎ会（保護者との合意形成②）（５月）

【参加者】小学部旧担任、中学部担任、保護者
＊主な内容は２月の個人面談で保護者と合意形成をしたものを新旧の担任と確認した。
・スケジュールを提示するタイミングや、スケジュール表を学校と家庭で活用すること
　→　引き続き中学部でも活用する。
・学習でのＩＣＴ教材の活用及びコミュニケーションの代替手段の精選と活用の検討

■　引き継いだ内容を学校生活支援シートに反映

３－１　コミュニケーション面の具体的な支援方法	
・言語でのコミュニケーションは難しいが、写真カードや絵カードを用いて次の活動や移動する場所を伝えることで理解して行動できる。またコミュニケーションブックを使用することでコミュニケーションがとりやすくなる。	
３－２　支援の目標	
〈長期目標〉	・カードなどを使って自分の気持ちを相手に伝えることができる。 ・見通しをもって活動し、予定の変更を受け入れて活動ができる。
〈中期目標〉	・日常生活や授業の中で、絵カードを使って相手に伝えられるようにする。 ・1週間の予定を掲示し、朝の会で一日の予定を確認し見通しをもつ。
学校の指導・支援	家庭の支援
・自分がやりたい遊びなどを、絵カードで伝える。 ・給食ではトングやお玉を使って料理を配膳する。 ・初めての活動でも活動内容を理解し、活動に参加できるよう支援する。 ・自分の順番を意識して、遅れないよう一列で歩く。	・タブレット端末のアプリケーションを使って、自分の気持ちを伝えるようにする。 ・食事の時に家庭の分まで箸や茶碗を並べるお手伝いをする。 ・学校の荷物は自分で準備、片づけをするようにする。
	地域の支援
	・地域内の学習支援施設や言語訓練施設を活用して、コミュニケーション能力の伸展を図る。

■学校では

・　コミュニケーション能力の発展を目指して、名詞や動詞、２語文を表す絵カードを活用して、理解できる言葉を増やしていけるよう支援している。また本人の興味があるタブレット端末を使用して、今日の下校方法を確認する等のコミュニケーションの練習を行っている。

・　はじめての活動に対する慎重な姿勢は中学部でも見られているが、活動を重ねる中で、徐々に主体的に活動に取り組めている様子が見られている。前もっての活動内容の提示と合わせて、活動を体感する中で見通しをもてるように支援することも有効な支援と考えられる。

■家庭では

・　楽しみながら行える、タブレット端末を利用したコミュニケーションを引き続きお願いしている。

家庭で利用している「学習支援施設」の支援方法を見学させてもらい、学校での学習支援方法、家庭での支援方法を同一にできるようにしました。

中学部担任

■　学校生活支援シートの内容から、各教科等の内容への反映（個別指導計画）
（個別指導計画「指導の手だて」から抜粋）

【国語】

・　名詞、動詞、２語文のカードを使い理解言語を増やす。カードを使用する際には、１枚１枚の内容を教員が読み上げ、確認する。

【特別活動（学校行事）】

・　時間割が通常と違う場合、行事用時間割りについてイラストを使って視覚的に確認できるようにする。

児童の変化

・　小学部からの継続した支援によって、予定変更や行事時間割りに対する抵抗感はなくなってきているように感じられる。
・　予定表を自分から気にして教員とコミュニケーションを取る姿も見られている。教員の説明を聞いて納得のできる場面が増えてきている。

保護者の反応

・　落ち着いて学校行事に参加できている様子を見て、成長を感じています。
・　予定変更などについては随分と受入れができるようになってきましたが、自分がやりたいということも強く意思表示するようになってきているようで、要求が通らないときの気持ちのコントロールが新たな課題と感じています。

保護者

災害時には、本人のみが避難所に避難することも考えられます。そのような場合に必要な情報をまとめたシートがあると関係機関と更に連携できそうです。

■　担当する教員が気付いたこと

・　学校生活支援シートの中に、支援会議等で得た「支援のヒント」を記載し、引き継いでいくことで、学校での指導や支援を具体的に明確に伝えることができました。
・　生徒の課題を家庭と共有することで、家庭と連携しながら課題解決していくきっかけを作ることができました。
・　個人面談を通して、具体的な教材等を共有し、生徒の実態把握をより明確でき、本人が得意とする部分の支援方法を具体化し、実践につなげることができました。
・　今後も、中学部の成果を具体的に学校生活支援シートへ記載することで、高等部そして卒業後へ引き継いでいきたいと思います。

学校生活支援シートを活用した引継ぎの事例　⑨

～外部専門家のアセスメントを反映した引継ぎ～

事例（知的障害特別支援学校）

・中学部２年（現在）　　障害名　知的障害

（生徒の様子）

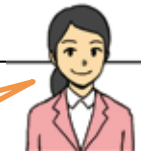
・　コミュニケーションは、音声言語と文字（簡単な漢字、ひらがな、カタカナ）
・　中学部入学時よりも、身体の使い方が上手になるとともに、自分の感情を少しずつコントロールできるようになってきた。
・　できたことを教員から評価を受けることを喜び、より頑張ろうとする姿が見られる。
・　「どれがいい？」の質問に答えることが難しい。
・　選択肢が用意されていたり、ルーティーン化されていたりすれば答えることができることもある。
・　経験したことが少ない事柄であればあるほど「どっちが正解なのか」と考えてしまう。

■本人・保護者のねがい

・　就労に向けて、誰とでもコミュニケーションをとれるようになってほしいです。

■担任のねがい

・　環境が変わっても、活動や遊びの中で「〇〇がやりたい」など安定して自分の気持ちを伝えることができるようになってほしい。
・　選択肢の中から自分のやりたいことを選べるようになってほしい。



進級に向けて、これまでの支援を評価し、引き継ぐ支援を整理しました。

■　支援内容･方法の形成的評価

〇有効な支援①

「言葉や絵カードを使って誉め、成功体験を増やす。」

・　誉められたことが分かり、いつも以上に自分の気持ちを伝える機会が増やす。
・　自分に自信をもつ。

↓

教室内で教員や友達に話し掛けたり、話しかけようとしたりする機会が増えた。選択肢の中から選べる回数も増えてきた。

〇有効な支援②

「好きなものや好きな活動を複数の選択肢から選ぶ。」

・　評価されることを期待して活動に取り組むことができ、好きな活動を選ぶことができるようにした。
・　「シカッチンシステム」の導入。
（詳細は右ページ）

↓

頑張ってためたシカッチンを、自分が好きなことに使う楽しみを覚えた。このことで、自分から好きな活動を選択できるようになってきた。

外部専門家

生活場面を通して、御褒美や休憩など、３つ以上の選択肢から選んで自分から相手に伝えることができるようにしましょう。

■「シカッチンシステム」の導入

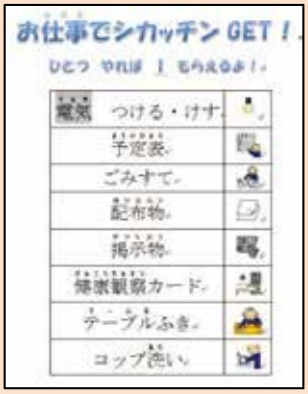
校外学習でショッピングモールの、「仕事体験」ができる場を計画し、仕事をすると擬似的な「お金」をもらえ、そのお金でお土産を購入できるシステムがあった。

校外学習の事前学習として、本校独自の紙幣「シカッチン」（※１）を作成した。校外学習先と同じように、クラスの係の仕事をすると「シカッチン」をもらうことができ、その「シカッチン」で給食のおかわりやパソコンで好きな動画等を見るなど、「自分のやりたいこと、好きなことを選べる」システム（※２）を取り入れた。当初は、「1000」「5000」「10000」の単位で実践したが、生徒一人一人への浸透は難しかった。

そこで、単位を「１」「５」「１０」として、より分かりやすい単位とした。また、生徒個人の強化子（注１）、取組内容は違ってもシカッチンを共通利用することとした。

注１…好きなことや物

※１　シカッチン



※２　選べる好きなこと

■　個人面談（保護者との合意形成①）（１月）

※主な内容

- 現在の生徒の様子や、今後の支援の方針を共通確認した。
- 進級して２年生になり、環境が変わるが、本人の課題を明確にした指導や支援の方針は変わらないことを確認した。
- ２年生から始める、一人通学についての注意事項について具体的に話し合った。
- 保護者の来年度に向けての不安を聞き取った。

同じ学部内でも、新年度に向けて保護者には不安がありますので、保護者と十分に話し合い、２年生の担任に引き継げるように準備を進めました。

１年生担任

進級（中学部１年→中学部２年）

■引継ぎ会（保護者との合意形成②）（４月）

【参加者】中学部１年担任、中学部２年担任、中学部２年副担任
※主な内容
・学校生活支援シートを基に、「自分から代名詞や属性を使って要求や拒否を音声言語で相手に伝えることができる」や「御褒美や休憩を３つ以上の選択肢から選んで自分から相手に伝えることができる」などのねらいを確認し、指導方法について話し合いました。
・保護者の願いや、将来についての考え方を共有できるように話合いを進めました。

→後日、引継ぎ会の内容を保護者に伝えました。

保護者

中学部１年の時の先生にお話ししていたことが新しい先生に伝わっていたので安心しました。本人も楽しみながら活動に参加できています。

☆指導の継続⇒保護者の安心

■　引き継いだ内容を学校生活支援シートに反映

３　支援の目標	
①自分から代名詞等を使って要求や拒否を音声言語で相手に伝えることができる。 ②御褒美や休憩を３つ以上の選択肢から選んで自分から相手に伝えることができる。 ③自分にとって最適な用具を選択肢の中から選ぶことができる（はさみ、カッター、筆記用具等）。	
学校の支援	家庭の支援
①本人が応える困難な状況を想定し、状況に応じた適切な表現方法を本人に伝えていく。繰り返し経験し、般化を促すような学習を設定する。 ②一日の予定を確認する際、休憩時間の過ごし方を選択制にする。 ③初めは作業内容に応じて必要な用具を一緒に選ぶ。徐々に自分で考えて選べるようにしていく。	①本人からの意思表示（言いたいけど言えなさそうにしている等）をなるべく見逃さないようにしていく。 ②家庭で選択できた事柄や活動内容を教員に伝え、連携を図る。 ③状況に応じて必要な用具を一緒に選ぶ。

■学校では
- １年生の時に実施していたことをベースに支援を行う。
- 環境が変わっても自信をもって参加できる場面を多く設定する。
- 個別や集団の中でも自分の意見を伝えやすいような環境の設定を工夫する。
- 教員や友達同士の関わりを多く設定し、状況に応じた言葉や動作を学べるようにしました。

■家庭では
- 家庭ならではの表情や、言動など、細かい様子を連絡帳で記入してもらえるようにお願いしました。
- 学校の様子も細かく伝え、情報の共有化、支援、指導方法の統一化を図るようにしました。
- 家でできたことは学校でも行い、学校でできたことは家庭でもできるようにしました。

２年生担任

１年の時の担任と、保護者への伝え方や、対応の仕方なども相談しました。また、学年としての統一された支援を目標とし、学年会等で情報の共有化を図るようにしました。

生徒の変化

- 中学部１年からの継続した支援によって、自信をもって発言したり、友達と自ら関わろうとしたりする機会が増えました。
- 学校で頑張ったことを連絡帳に記入することで、家庭でも頑張ったことを誉めてもらう場面が増えました。
- 選択肢の中から選ぶことも、あまり悩まなくなってきました。

保護者の反応

- 中１の時に担任に伝えたことが、中２の担任に伝わっていて安心しました。
- 学校生活支援シートがあることで、学校、家庭での指導、支援方法の共有化が図れていることが良いです。

将来、様々な大人が本人に接することを考えると、担任が３年間同じよりも毎年変わることもよいと思います。環境が変わることも経験と捉え、自分の力に変えていってほしいです。そのためにも、指導をつないでもらえることは安心です。

保護者

■　担当する教員が気付いたこと

- 支援の目標に対して、学校、家庭が同じ方向を向いて取り組まなければ成果は望めないと思います。
- 学校生活支援シートや個別指導計画等の内容を共有し、学年として取り組むことがより効果的な指導につながります。
- 新担任への引継ぎには、資料を基に話し合いますが、こまめに進捗状況の確認や相談する機会を設けていくことが大切です。
- こまめに保護者と連絡をとり、家庭での様子を聞き取り、今後の指導や支援の内容に反映していきたいです。

学校生活支援シートを活用した引継ぎの事例　⑩

～関係機関との連携を図った引継ぎ～

事例（肢体不自由特別支援学校）

・高等部１年（現在）　　障害名　てんかん、広汎性発達障害

（中学部の生徒の様子）

・　小学校４年生から中学校１年まで、不登校の状況が続き、中学部２年に進級する時点で本校に転入した。てんかんの発作が多く、祖父の家で自分の好きなことをして過ごすことが多く、不登校の期間が長く続いている。

・　週に１回程度登校するが、「給食のにおいが耐えられない」ということで早退を申し出ることがあるなど、学校生活が定着しないでいる。

・　保護者は、これまでの「登校しぶり」の状態を何とかしたいと働き掛けてきた。一方で、主治医の「本人が自分で選択しないと取り組めない。無理強いのかたちは難しい。」という方針に対して具体的な解決策（効果的な関わり方）が見付けられずにいる。

■本人・保護者のねがい

・発作を減らして、自立してほしい。

・勉強をして、漢字や語彙を増やし、読解力をつけてほしい。

・計算機を使ってよいので、お店でお釣りが分かるようになってほしい。

・本人が好きな絵を描くことを続けていきたい。

■中学部担任のねがい

・登校日数が増え、継続した学習を積み重ねていきたい。

・卒業後、地域とのつながりを維持できるように、基本的な生活習慣を身に付けさせたい。

■　個人面談（１２月）次年度への共通理解

保護者

週１のみの登校ですし、薬の影響か、登校しても寝てしまうことが多く、家庭でも、「勉強の時間を持つ」ということが難しいです。来年度は訪問指導にしてもらった方が良いのでしょうか。

今学期は、てんかんの発作も多く、体調が安定しませんでしたが、登校時には個別課題に取り組めるようになってきています。登校を重ねて、学習や学校生活への意欲を高めていきましょう。学校だけでなく、福祉など関係する方が学校に集まり、支援会議を行いませんか。

中学部担任

訪問教育についての概要や、保護者の働き掛けについて聞き取るとともに、卒業後の進路に向けて、学校に登校することの意義について共通理解を図るようにしました。

■ 支援会議（2月）

【参加者】保護者、区障害福祉課障害相談係、療育センター心理士、相談支援専門員、障害者地域生活自立支援室相談員、副校長、担任、高等部教員（学部主幹、学年主任）、訪問部主任、特別支援教育コーディネーター

※　主な内容

各関係機関と通学することの意義の確認、支援の方法の共有

将来の目指す姿

卒業後も、地域のつながりを維持した生活を送る。

継続した学習を受ける

登校時には、個別課題に取り組める時間を確保することができるようにする。登校日数が少ないようであれば、家庭に訪問して出張授業等を行う。

卒業後の進路先・生活をイメージする

てんかんの発作があっても作業所に通っている人もおり、施設見学を通して実際に活動している様子を知る。

・学習面に関しては、本人が興味をもっていることでないと意欲が高まらないので個別に配慮が必要である。
・集団学習では学習の流れに乗りにくいため、個別課題を行う。

・ヘルパーとの外出では、寒い時期になり外に出たがらなくなった。
・ショートステイでは、趣味を共有できる存在が少なく、行きたがらないことが多い。

現状の把握

■　今後の学校生活

・　週に１回登校する生活を維持するが、欠席が多い場合は家庭訪問を行い、学校の活動や授業の様子を伝えて学校への意識を継続してもてるようにする。
・　本人の学習や登校への意欲の高まりに応じて、登校日数を増やす。
・　卒業後の進路先についてイメージをもてるようにする。

中学部担任

中学部を卒業になりますので、高等部でも引き続き支援して、学校生活を充実していきましょう。

進学（中学部卒業・高等部入学）

■　引継いだ内容を学校生活支援シートに反映

３　支援の目標	
・　スモールステップで本人の特性に合った指導、支援を継続して行う。 ・　登校が難しい時は、体制の許す範囲で家庭訪問・指導を行い、本人が学校とつながっている意識を失わないようにする。	
学校の支援	家庭の支援
・　登校した時にはできたことをほめ、次へとつなげる言葉掛けをし、本人の自己肯定感を高める指導をする。 ・　卒業後の進路に向け、基本的な生活習慣の確立とコミュニケーション能力の向上を目指す。	・　本人に疑問があるときは、言葉で丁寧に説明する。 ・　予定などをあらかじめ伝えておき、見通しをもてるようにする。 ・　興味のある対象が広がるよう、外出や好きな活動を増やしていく。

主な介護者	移動（家族）
食事（家族・ヘルパー）	排せつ（家族・ヘルパー）
着脱（家族・ヘルパー）	入浴（家族・ヘルパー）

■学校では
・　欠席が続くときには、校内体制を整え担任が家庭訪問をし、学校の様子を伝えるなどして、登校したいという意識が途切れないようにする。
・　興味のもてる活動を中心にしつつ、卒業後の生活や、集団生活を送るために必要な基本的生活習慣を身に付けることから取り組む。

■家庭では
・　本人の負担にならないよう、体調の良い時には登校できるよう働きかける。
・　週や月ごとの予定に見通しを立て、本人に分かるように伝える。
※　学校を欠席して自宅にいるときに介助をしてくれていた祖父の負担軽減も考え、ヘルパーの利用について相談する。

個別指導計画における目標

・　基礎学力の向上と生活に関連した知識を習得し、活用する。
・　集団生活の中で、自分の良さを発揮し、より多くの人との関わりを楽しむ。

○　週１回の登校が安定してきたので、本人と相談して１０月からは週に２回の登校にしました。
○　週２回の登校も、疲れがたまったり、てんかんの発作が増えたりすることはなく安定しています。

生徒の変化

- 担当する教員との言葉でのやりとりが長く続くようになってきた。また、教員だけでなく、友達とのやりとりが見られるようになってきた。
- 担任と関係が築けてきて、『先生に言われたら、仕方ないのでやるか』というような指導を受け容れる態度が見られるようになってきた。
- 興味のある活動や得意な活動場面で、生き生きと意欲的に活動する姿が増えてきた。

保護者の反応

- 週２回の登校が安定してきて、大変うれしく思います。
- 本人が急きょ「休みたい」と訴えた時でも、登校する曜日として決めていた日に関しては、登校するよう本人に促すようにしてきました。

保護者

高等部に進学しても、引き続きの指導をしていただいたので、本人も安心して登校できるようです。

中学部で行った支援会議では、関係する機関と保護者と一緒に必要な支援について話し合うことで、今後の学校生活に見通しをもつことができました。家庭の協力のもとで、支援の方向性や方法について共通理解を図ることができましたので、高等部でも引き続きの支援を行うことができ、継続した登校ができるようになってきました。

高等部担任

■　担当する教員が気付いたこと

- 支援会議後、保護者が生徒の生活に対する意識が変わってきて、意識的に登校を促すことで登校回数の増加につながりました。
- 登校を重ねることができたことで、学校での様子も変わりつつあります。まだ、週２回の登校で、登校できた日も午前中は強い眠気がある様子で、基本的な生活習慣の確立とまでは至っていませんが、教員や友達との人間関係が広がり、楽しく会話をする様子が見られるようになりました。
- 学校で多くの人が関わるということも効果的であり、今後も様々な機関と連携し、生活の場を広げるようにしていきたいと思います。

学校生活支援シートを活用した引継ぎの事例　⑪

～特別支援学校間の支援の継続～

事例（知的障害特別支援学校）

・　高等部１年（現在）　　障害名　ダウン症候群
（中学部３年の生徒の様子）
・　小学部・中学部が設置されている特別支援学校で、中学部を卒業する生徒のほとんどが隣接する高等部単独の特別支援学校へ進学している。
・　隣接してはいるが、別の特別支援学校への進学ということで、学校間では中学部から高等部への引継ぎを十分に行っている。
・　引継ぎ等に保護者が主体的に参画できるよう、「作成支援シート」の作成会を開催し、実際に保護者と相談しながら記入する内容をともに考えた。
・　保護者とのやり取りの中で、「学校生活支援ファイル」の意義と活用についても説明し、今後の活用場面や、有効な支援を得られるための有用なツールになること、障害者基礎年金の申請時の重要な資料となることなどに、保護者の関心は非常に高かった。

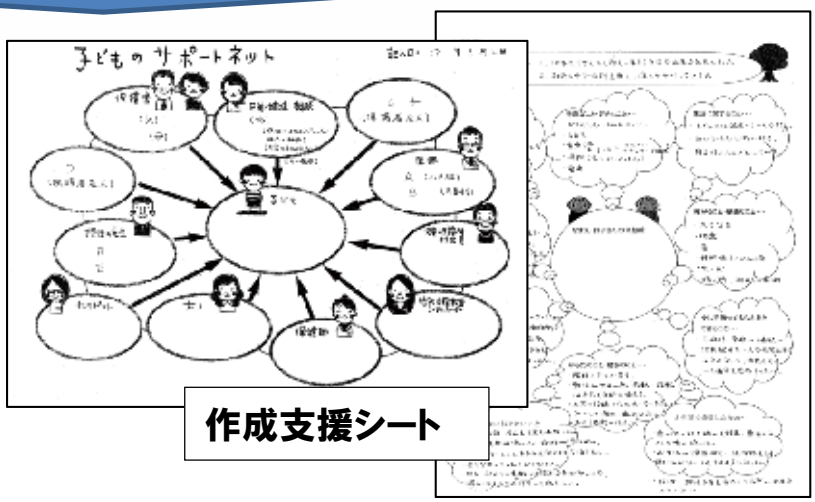
保護者

高等部の特別支援学校に進学しますが、これまでの支援は引き継いでもらえるのでしょうか？
また一からスタートするのは不安です。

これまでの支援の引継ぎを行えるよう、中学部の担任と高等部の担当の先生と支援会議を予定しています。
支援会議の際に引き継ぐ内容を整理しますので、「作成支援シート」の記入をお願いします。

中学部担任

「作成支援シート」１，２を保護者が記入し、本校でそれまで使用していた個別の教育支援計画との擦り合わせを行い、学校生活支援シートを作成しました。
引継ぎに視点を当てたため、学校生活支援シートの項目１１，１２に焦点を絞ったものとなりました。



作成支援シート

■　学校生活支援シートに反映

1　学校生活への期待や成長への願い	
本人から	
保護者から	何事も（少しでも多くのことを）自分でできる自立した人 社会の中で役割を果たし、深く関わっていく人

2　現在のお子さんの様子（得意なこと・頑張っていること、不安なことなど）

高等部に伝えたいこと:

・自分の感情や考えを言葉で表現したいという意思は強いので、コミュニケーションをとる力を向上させていただきたい。

・いろいろなことにチャレンジさせたい。ただし、初めての事柄に対する不安が強いので、徐々に慣れるような指導をしていただきたい。

3　支援の目標

・誰にでも伝わるコミュニケーションの方法を学ぶ。

・自分でできることを増やす。

・友達などとの望ましいコミュニケーションの取り方に対して理解を深める。

11　成長の様子

保護者:食べ物の好き嫌い（野菜・魚など）が、大幅に減った。お手伝い（食器拭き、洗濯物を干す、取り込む）をするようになった。挨拶や謝ることを自分から自然に行えるようになった。

担任:生活の中で見通しがついたことで、自分から次のことを予測して積極的に活動に参加することができるようになった。また、初めてのことでも自分から取り組むことができるようになってきた。一人で公共交通機関を利用することができるようになった。

12　来年度への引継ぎ

　初めての環境では、応答することや自分から動くことが難しい場面があるが、内容を説明したり、見本を見せることで安心して返答したり、課題に取り組むことができるようになっている。

身辺整理はできるが、集中力が十分でなく、よそ見をしてしまう場合には、集中できるような環境や言葉掛けをしていくことが必要である。また、忘れ物等の確認を行う。

■　支援会議の実施

**　保護者に記入していただいた「作成支援シート」を基に、引継ぎに必要な事項を盛り込んで作成した「学校生活支援シート」を保護者と確認し、原本を支援会議当日、保護者が持参しました。**

進学（中学部卒業・高等部入学）

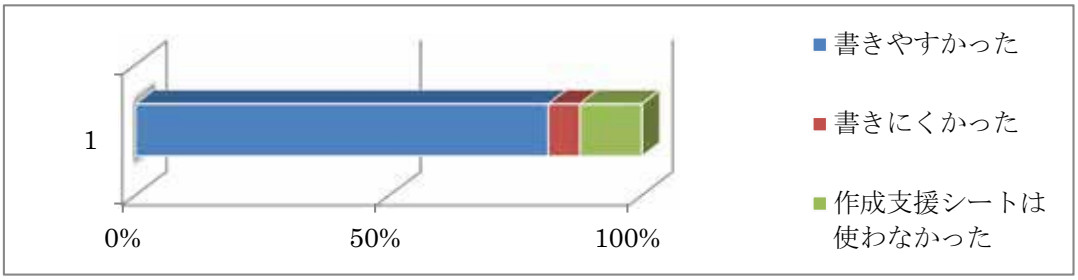
■ 本校における学校生活支援ファイル実践アンケート

※（　）内の数字は回答数　※･は自由記入

本校では、学校生活支援シートを活用した引継ぎについて、新年度にアンケートを実施しました。

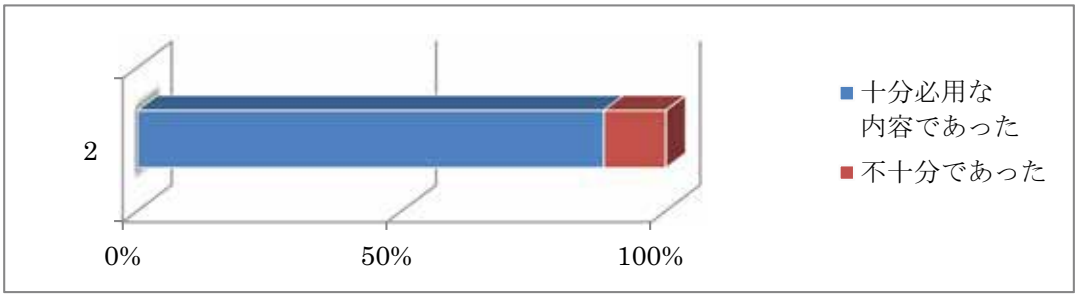
1　『学校生活支援シート』を作成するに当たり使用した『作成支援シート 1，2』について伺います。

◆書きやすかった（ 13 ）　◆書きにくかった（ 1 ）　◆作成支援シートは使わなかった（ 2 ）



2　『学校生活支援シート』の項目は、引継ぎに活用できる内容が盛り込まれていたでしょうか？

◆十分、引継ぎに必要な内容であった（ 15 ）　◆引継ぎには不十分であった（ 2 ）



3　引継ぎに不足している内容、項目について具体的に教えてください。

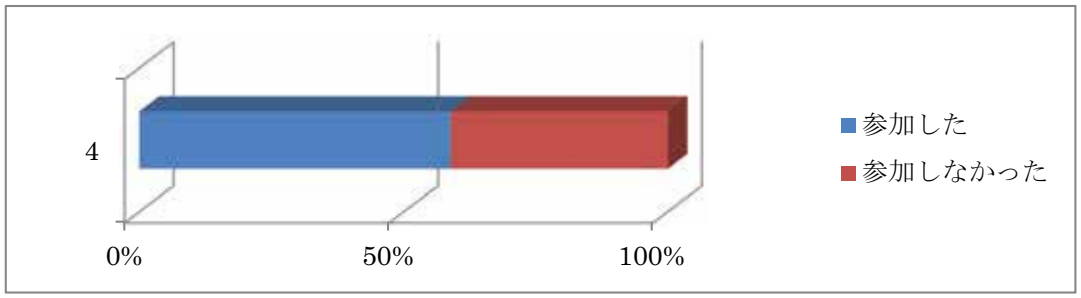
･学習の進み具合、様子、普段の生活の態度や本人のこれまで取り組んだことなどが伝わっていないように感じた。

･軽度用、重度用があると良い

･地域とのつながり、支援機関との連携部分を充実させた方が良い。

4　『学校生活支援シートを活用した引継ぎ会』へ参加しましたか？

◆参加した（ 10 ）　◆参加しなかった（ 7 ）



5　4の質問で「参加しなかった」と回答された方に伺います。

◆参加したかったが日程が合わなかった（ 6 ）

◆必要と思わなかったので、参加しなかった（ 1 ）

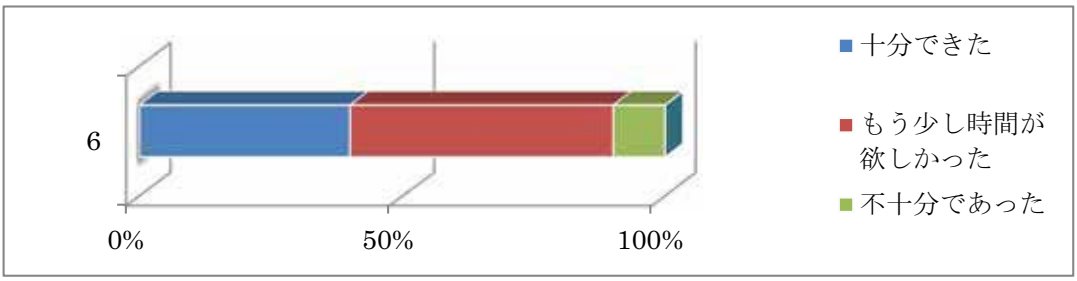
引き継ぎ支援会議には本人が参加したケースもあった。
その後、高等部入学後７月に事後アンケートを実施し、作成支援シートや引き継ぎ支援会議についての感想を頂いた。

６　『引き継ぎ会』に参加された方に伺います。

◆十分、引き継ぎたい内容を伝えることができた（ ４ ）　◆もう少し時間が欲しかった（ ５ ）

◆不十分であった（ １ ）　◆話しにくかった（ ０ ）

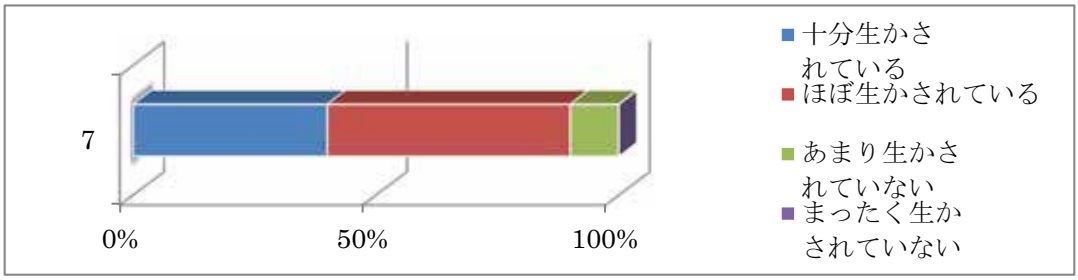
◆あまり聞いてもらえなかった（ ０ ）　・子供も一緒に出席したほうが良い



７　『引き継ぎ会』で伝えた内容は、現在の指導に生かされているでしょうか？

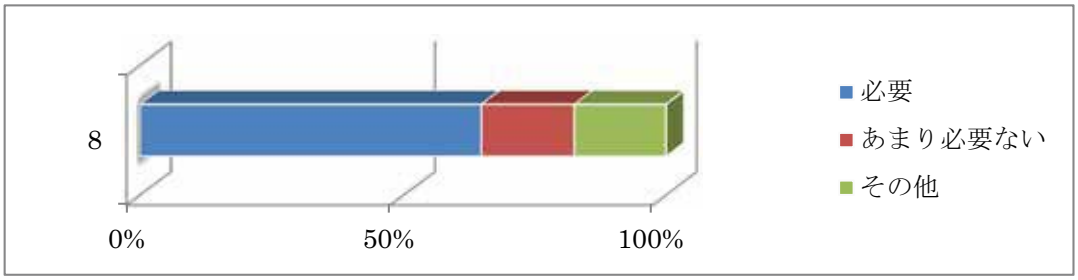
◆十分生かされている（ １ ）　◆ほぼ生かされている（ ７ ）　◆あまり生かされていない（ ３ ）

◆全く生かされていない（ ０ ）　・引き継ぎ会に出席した先生から担任に引き継がれていない



８　今年度以降、『引き継ぎ会』の継続について伺います。

◆学部が変わるので必要（ 11 ）　◆あまり必要ない（ ３ ）　◆その他（ ３ ）



- 新学期の個人面談は、十分時間を取ってほしい
- 学年が上がる時は、先生とコミュニケーションがとれていれば引継ぎ会は必要ないが、学部や学校が変わる時の引継ぎ会は安心できた。
- 「学校生活支援ファイル」は、子供を見直す良い機会で、デイサービスやサークルなどに子供を出す時に活用できればとても良い。
- 一回の引継ぎだけでは伝わりにくい部分や実際に接していただいて分かり合える部分、親には分からない面など、文章やリストだけの表現より、分かりやすかったと思う。

■　担当する教員が気付いたこと

- 支援シートの作成会は、やり取りをしながら進めることで、保護者が我が子の現状を客観視する良い機会になっていました。保護者が支援体制の必要性を感じていても、現実としてネットワークができていないことが明らかになりました。
- 保護者が引き継ぎ会に参加することで、どのような内容が引き継がれていくのか確認ができるので、安心感につながりました。自分の意思を伝えることができる生徒については、支援会議に本人が同席することも必要だと感じました。
- 成長に合わせて保存すべき資料はたくさんあります。どのタイミングで保存すべきか、誰が保存を促すのが良いのかを検討し、生涯を通した支援をつないでいくためにも、**地域との連携や関わる支援者同士の連携が必要不可欠です。**

学校生活支援シートを活用した引継ぎの事例　⑫

～特別支援学級から特別支援学校高等部入学時の引継ぎ～

本校は、高等部単独の知的障害特別支援学校（普通科）である。生徒は特別支援学校中学部、地域の中学校特別支援学級、通級の学級、普通学級から入学している。

そのため、日常生活面での課題が主な重度の生徒から軽度の生徒まで幅が広い。また、教育歴、成育歴、家庭の背景等様々であり、これから社会に出ていく準備期間である高等部の３年間、進路先へも含めて確実に、より良い支援をつないでいくことが高等部の大切な役割である。

事例（知的障害特別支援学校）

・高等部１年（現在）　障害名　知的障害

（入学時の生徒の様子）

・　小学校入学後、障害に気付くまで、本人・保護者ともに迷い悩んだ経過があり、小学校４年で特別支援学級の在籍となった。
・　中学校３年生時に、他の生徒から暴言を受け、以来不登校となる。もともと選択性かん黙の傾向にあったがより症状が強くなる。
・　質問にどう答えたらよいか迷い、かん黙傾向になる。
・　周囲の人に助けを求めたり、まだ嫌なことを嫌と言えないことも多かったりするが、教員との信頼関係の中で少しずつ改善されてきている。
・　他の教科に比べ、特に数学の苦手意識が強く、できない自分にイライラし、気持ちが不安定なることがある。今後は、お金の計算や、時計の読み方など社会生活に必要な学習の支援の工夫が大切である。
・　手先がとても器用であり、美術、家庭科、作業を伴うものなどに意欲的に取り組み、作品の完成度も高い。

■本人・保護者のねがい

・同性の友達を作りたい。ダンス部で活躍したい。将来はスィーツ、パン屋さん、もしくは子供たちに携わる仕事をしてみたい（本人）。
・高校生活の３年間は楽しかったと思えることを体験し、感じてほしい。買い物が一人でできるようになってほしい（保護者）。

■中学校担任のねがい

・自分の考えや思いを伝えられるようになってほしい。
・学校生活を楽しみ、自信をもって取り組めることを増やしてほしい。

■　引き継ぎ会（８月）

【参加者】地域特別支援学級、通級、普通学級の担任、入学相談担当

本校入学希望者について情報収集と個別教育支援計画(学校生活支援シート)などの資料を基に出身中学校ごとに全体的な引継ぎを行った。

○　中学校からの引き継ぎ資料（個別指導計画）

実態　　基本的生活習慣が確立し、落ち着いて生活している。学習態度が大変まじめで、課題にしっかり向き合い最後まで取り組むことができる。選択性かん黙の傾向があり、自分の思いや、考えを伝える力が弱くコミュニケーション面に課題がある。

学習　　どの教科にもまじめに取り組むが、国語では人前で発表することが難しく課題である。また、他の教科に比べて数学に苦手意識が強い。手先が器用で美術や家庭科などが得意である。

配慮事項　　中３より不登校　週に一回一時間と給食のみ　クラスに入れず講師の先生と給食を食べる。
他の生徒からの暴言を受けトラウマがあり言葉掛けは優しくお願いしたい。
進路を自分で決めることができ、高等部入学への期待が大きいが、不安もある。

■　引き継ぎ会（３月　入学確定後）

【参加者】地域特別支援学級、通級、普通学級の担任、本校新担任、入学相談担当

入学決定者一人一人のケースにについて、学校生活支援シート等の資料を基に丁寧に引継ぎを行った。

高等部への入学ですが、特別支援学級や普通級からの入学に当たっては、学校生活支援ファイル等を初めて作成する場合がありますので、より丁寧に引継ぎを行う必要があります。

高等部教員

高等部入学

■　学校生活支援シートの作成　（４月から）

本校の学校生活支援シート作成の流れ

①　保護者への説明（プロフィール表（実態表）のシートを追加し、記入例の見本、書き方のポイントを添えてシートを配布）
②　保護者が記入したシート、引き継ぎ資料（学校生活支援シート、実態表等）を基に担任が作成
③　作成したシートを保護者に提示し、加筆、修正等保護者とやり取りを行う
⇒**共通理解**
④　最終的に完成したシートを保護者が確認、承諾　⇒　**保護者との合意形成**

■　配慮することや支援の柱を確認

・　暴言を受けて不登校になったことを受け止め、言葉掛け、話し方に配慮する。
・　登校に対して不安が大きいため、スモールステップ（※）の計画を行い、家庭と連携し支援する。
・　自分の考え、思いを伝える機会を日常的に設定する（朝の会等での一言発表など）。
・　部活動や、作業班等を通して自信をもって取り組めることが増えるように支援する。

特別支援学校の具体的な支援の計画（※スモールステップの例）

- **入学前体験登校を実施　２回**
- **段階的な登校支援**

ステップ１　朝だけ保護者と登校から始める。

ステップ２　付き添いを　学校の最寄駅までに縮める。

ステップ３　自宅から学校まで一人で通学し、保護者は距離をおいて見守る。

ステップ４　一人登下校へ

- **学年会を中心にケースの実態を伝え、対応や支援の方法について共通理解を図る**

□　作成した学校生活支援シートを保護者に提示　→個人面談

保護者との合意　承諾

- 実態表の内容や配慮事項が適切に示されているか。
- 保護者、本人の願いが反映されているか。
- 支援の目標と手だてが適切か。
- 家庭と学校の支援が連携しているか　　など

※各区市町村の福祉課等へ提出

- 支援が必要な時にスムーズに対応できるようにする。
- 卒業後の生活を想定して、進路等の情報交換を行う。

高等部教員

学校生活支援シートを関係機関に提出する場合は、必ず保護者の同意を得るか、保護者が関係機関に持って行くよう働きかけることが必要です。

生徒の変化

- 欠席をすることなく、登校を重ねることができた。
- ４月当初は、保護者が学校に入るまで付き添っていたが、６月には最寄の駅まで、その後は一人で登校できる日が増えてきた。
- 部活動を楽しみにし、友達もできている。
- 学校生活を楽しんでいる様子が伺える。
- まだ、嫌なことを嫌と言えなかったりするが、少しずつ自分の思いを担任に相談できるようになってきた。

■　学校生活支援シートの作成例

３　支援の目標	
・自分の気持ちを周囲に伝えられるようになる。　分からないことが聞ける　嫌なことを嫌と言える。 ・相手や、場面に合わせて必要なことが言えるようになる。（報告、連絡、相談） ・自信をもって取り組めることを増やし、希望の進路につなげていく。 ・登校支援を行う。	
必要と思われる支援	
・優しい声掛け、話し方で接する。 ・意識的に場面を設定し、報告、連絡、相談の経験を積み重ねる。 ・部活、行事、作業等で様々な経験を広げ、できることを増やし、自信を育む。 ・登校支援について家庭と連携し、スモールステップを踏みながら行う。	
学校の指導・支援	家庭の支援
・初めての活動は事前に伝え、本人が見通しをもって臨めるようにする。 ・集団活動で、注意がそれてしまう場合は、適宜、個々に指示をして本人が理解して行動できるようにする。 ・他者との関わりでは、教員が介入することで子供同士のやり取りや関わり方を覚えていけるようにする。	・学校での様子を聞き取り、困っていることや、苦手なことなどに対して相談できるような雰囲気を心掛ける。 ・家庭の中で報告の場面を設定するなど日常的に取り組んでいく。 ・成功体験、楽しかったことなどを共有し、自信をもって様々なことに挑戦できるように支援する。

高等部教員

学校生活支援シートや学校生活支援ファイルの作成・活用は必要不可欠であり、区市町村教育委員会とも連携し、特別支援学級、通級指導学級、通常の学級における特別な支援が必要な生徒への学校生活支援シート作成と活用についての情報提供、理解推進に努めていきます。

■　担当する教員が気付いたこと

- 中学校の不登校の状態を心配していましたが、保護者や中学校の先生との引継ぎを十分に行ったことで配慮することや支援を明確にし、スムーズに学校生活をスタートすることができました。
- 一人通学については、事前に生徒に説明し、見通しをもてるようにしました。このことで、目標をもって一人通学を目指して頑張ることができました。
- 学校生活に対する不安が徐々に解消されてきたようで、家庭で学校の学習の内容や、友達のこと、部活動のことなどの話をすることが多くなったと保護者に聞きました。
- 学校や家庭で自分が嫌なことははっきりと伝えられる場面が見られるようになりました。
- 家庭や学校が連携し、安心して過ごすことができる環境を整えたことが信頼関係につながり、引き続き支援を継続していきたいと思います。

※ 本報告書に掲載してあるイラストは、都立多摩桜の丘学園若林　啓教諭の御協力を頂きました。

教育庁では、以下の者が担当した。

所属・職	氏　　名
教育庁指導部特別支援教育指導課長	伏見　明
教育庁指導部主任指導主事（特別支援教育担当）	緒方　直彦
教育庁指導部特別支援教育指導課統括指導主事	島添　聡
教育庁指導部特別支援教育指導課指導主事	濱渦　孝治

平成２７年度都立特別支援学校のキャリア教育の普及・啓発に係る指導資料

東京都教育委員会印刷登録
平成２７年度　第２３６号

発行日　平成２８年３月２８日
発　行　東京都教育庁指導部特別支援教育指導課
所在地　〒163-8001　東京都新宿区西新宿２丁目８番地１号
電話番号　０３（５３２０）６８４７

R70
古紙パルプ配合率70%再生紙を使用しています

リサイクル適性Ⓐ
この印刷物は、印刷用の紙へ
リサイクルできます。